



CANADA VANCOUVER

ヴァンクーバーで活躍する日本人ルシアー

川上祐介氏は1972年岐阜生まれ。実家がギター製作所ということもあり自然と若い頃からギター作りに興味を持ち、本格的に製作を始めたのが22歳の頃。1年ほどカナダのラリヴィー工場へ研修に来たあと本格的に移住したのが2002年のこと。最初は友人の小さな工房に間借りして製作を始めたが、2010年6月に今の工房を開く。

訪ねてみて最初に驚いたのがその工房の作り。何と2階部分をウッドフロアも含め全部自分で作ってしまったのだ。それが半端でなく玄人はだしの仕事で、ここまでできるならギターを作らず、大工になって家一軒作ったらと思うほどなのだ。(うちもニューポートの家の床貼ってくれんかね?)

さてギターのお話。年に20本くらい作るというギターは、殆どがジャンボ仕様でカタウェイが多い。特筆すべきはこの10月に取得したという特許。右手の肘の当たる所の角がゆるやかに削られた構造になってい





川上氏の作るハイリバー・ウクレレは、写真を見ればお分かりの通り、マーティンのドレッドノートにこだわったウクレレである。できるだけ本物の縮小版に近づけるためにボディはテナー・サイズ、ネックの長さはコンサートとテナーの中間のスケールを採用しているようだ。写真左はコアを使用したD-28仕様のUD-28KK(プロトタイプ)で、ヘリンボーンのパーフルーグにスロテッド・ダイヤモンドのポジションマーク、右はキルテッド・マホガニーを使用したD-18仕様のUD-18MM(プロトタイプ)でスロテッド・ヘッドになっている。工房を訪れたときは、ちょうど45スタイルのインレイを入れたものを製作しているところだった。



るのだ。それもバインディングの続きにあたる場所を1本の木から削りだしている。勿論ギターの内側に当たる添え木も途中から太くなくなっていくという複雑な仕組み。このアイデア自体は昔お母さんがギターを弾く時に、ひざにサポーターをあてているのを見て浮かんだとか。この方法は既にG・ラスキンやK・ライアンが取り上げているが、彼等のものをコピーするのは嫌で独自に考案したもの。彼はこれを『曲げひねり工法』と呼んでいて、その構造と技法が特許になった。現在顧客が注文してくるギターの殆どがこの構造を望んでいて、Dサイズにまで注文がある。

ギターとは別にウクレレにも力を入れている。マーティンの古いウクレレを研究し、シェイプはDサイズを小さくしたような形。製作中の45スタイルはいたるところにインレイが入っていてミニD-45という高級な趣き。日本向けにはソリッドヘッドとスロテッドヘッドの両方が用意されている。

